

「古都散策」



東リ社長 永嶋元博
ながしま もとひろ

関西(伊丹・本社所在地)と関東(千葉県)の二重生活の始まりは、今から20年前。41歳の時に経営企画部次長を命じられ、関西での単身赴任がスタートだった。営業出身の自分にとって経営企画の仕事は全てが一から勉強であり、日々悪戦苦闘の毎日だったが、そんな自分(関東出身の熱烈虎党)を癒してくれたのは、シーズン中であればほぼ毎日のようにタイガース戦がTV放映される事と、休日には好きなだけ奈良や京都の古都散策の機会が得られた事である。

週末になれば、土曜日は慣れない経営企画業務の補習にあて、日曜日は「歩き」専門のガイドブックをリュックに忍ばせて名所旧跡巡りで頭も身体もリフレッシュというのが、いつしか私の定番メニューとなっていた。

今どきの便利なスマホ機能もなく土地勘のない自分にとっては、ガイドブックが唯一の頼りであり、行きたい場所を決めたら最寄りまでの交通機関を調べてその日の散策コースを構想するといった具合である。朝早くに伊丹を出発すれば、奈良でも京都でも9時頃からは歩き始められる。大抵は駅近くのコンビニでおにぎりとお茶を購入し、一日かけて4〜6時間、少し欲張ると7時間以上のハードな散策コースとなる。

そんな週末の積み重ねによって神社仏閣巡りの楽しさを知り、行った先々で古都の歴史をたどってひたすら歩くのは、私にはとても有意義な休日のひとときである。まず、外の空気を吸いながら一日を十二分に活用すれば最高の気分転換に繋がる。そして、クルマや交通機関を使わずに街や里山を歩けば多くの新たな発見がある。一人で歩き続けると時には仕事での新たなヒントも思い浮かぶ(めったにない...)、古刹の仏様の前に座して瞑想にふける、といった非日常の効用も大いに楽しめる。しっかりと使ったんだ奈良と京都のガイドブックは、20年経った今もなお私の大切な携行品であり宝物となっている。

その後、家族に迷惑をかけ続けつつ、単身赴任から現在の二重生活となり、かつての「ひととき」はめっきり減っているが、「歩き」に対する気持ちは一向に衰えていない。春と秋には10名前後の社員と連れ立って私の選定したコースを巡る「歩こうル会」を開催、もちろん最後の「ル」は、歩き切った後の美味しい一杯である。

コロナ禍となって様々な制約と窮屈を強いられる中、皆が遠慮なく自然や歴史を満喫出来る日々が待ち遠しいかぎりだ。